読売選書

興津　要

異端のアルチザンたち

応賀　円遊　金鶯
小せん　藍泉

端のアルチザンたち

応賀　円遊　金鵞　小せん　藍泉

津　要

読売選書
20

著者紹介　1924年栃木県生まれ，早大文学部卒。早大教授。著書に「転換期の文学」「明治開化期文学の研究」「大衆文学の映像」「三遊亭円朝集」「落語」「薫響集」(共著)などがある。

読売選書

異端のアルチザンたち

昭和四十七年　五　月二十日　第一刷
昭和　五十年　四　月三十日　第二刷

著　者　興津　要

編集人　松田　延夫

発行人　二宮　信親

発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一〒一〇〇
大阪市北区野崎町七　七〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一〒八〇二

印刷所　図書印刷株式会社

製本所　協和製本株式会社

定　価　九〇〇円　1395—301201—8715

©, KANAME OKITSU, 1972

目次

まえがき

万亭応賀　11

挫折の青春　戯作者応賀の誕生　新時代への反逆
悲惨なる旅路の果て

ステテコの円遊　55

円遊の生い立ち　円遊と遊三の縁　円朝にあこがれる円遊　若き円朝の高座　円遊落語界へ入る
円遊の初高座　円遊ついに円朝門下となる　苦悩する円遊　ステテコ誕生　文明開化の風俗詩人
花形円遊の人気　凋落の日のおとずれ

梅亭金鵞　113

生い立ち　戯作者金鵞の誕生　文明開化期の金鵞
戯作者金鵞の復活　茶番に終えた生涯

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

盲小せん 149
小せん誕生　落語家への道　小せん売りだす
暗い宿命の道へ　盲小せんの世界

高畠藍泉 201
多感なる青春　〈無用の人〉の季節　ジャーナリズムへの道　作家藍泉の誕生　宿命の三世種彦襲名
敗残の晩年

装丁　栃折久美子

異端のアルチザンたち

——応賀、円遊、金鶯、小せん、藍泉

まえがき

この本は、初めの予定では、『幕末・明治のアウトサイダー』というサブ・タイトルをつけるはずだった。しかし、『異端のアルチザンたち——幕末・明治のアウトサイダー』という題名では、どうもはっきりしないだろうというところから、このように、そのアルチザンたちの名前をならべることにした——と、こう書いてくれば、この本の性格は、だいたいにおいておわかりいただけることとおもう。

つまり、ここにとりあげたひとたちは、ありあまる才能を抱きながら、幕末から明治にかけての、激動する時代の流れに押し流され、その才能を生かすべき機会にめぐまれることなく、不本意にも、アウトサイダーとしての道を歩むことを余儀なくされてしまったのだった。

このひとたちにとって、その生涯は、一見、平穏無事の様相を呈してはいるものの、その内面生活に立ちいってみれば、それは、巨大な社会機構や激変する時流のなかの歯車の一つにも似

て、生きるに甲斐のない、あるいは、おもうにまかせない、焦ら立たしい日々の連続であったことであろう。

たとえば、幕末から明治初期にかけての代表的戯作者であった梅亭金鵞や万亭応賀の生涯をみるとき、そこに、封建時代末期から近代の初頭にかけて、強烈な野望と、それにふさわしい才能や学識とを持ちながら、しかも夢やぶれて、むなしくアウトサイダーとしておわらねばならなかった宿命悲劇を読みとらずにはいられない。

物情騒然たる幕末の政治的変革期にもかかわらず、池の端に住む戯作者松亭金水の家と、本郷の梅亭金鵞の家とは、あたかも滝亭鯉丈描くところの『花暦八笑人』や『滑稽和合人』の世界のごとく、有閑青年たちの悪ふざけの舞台であり、とくに、その中心人物として悪ふざけのお先棒をかついだのは、梅亭金鵞と万亭応賀だった。

両国薬研堀の剣客吉田勝之丞の子として生まれた金鵞は、青雲の志に燃えて剣の道に精進し、若くして江戸若手剣士中の雄とうたわれながら、その腕を生かすべくもない御家人の次男坊として、時代に背をむけ、いつしか戯作者の群れに身を投じていったのであり、応賀もまた、彼の才知をみこんだ父親の服部勾当に十分に学問をしこまれて、士分の株を買いあたえられ、自己の才知に対する自負心と青雲の大志を抱きつつ、一度は、常陸下妻藩に出仕してみたものの、門地門閥を持たないにわかざむらいの悲しさ、個人的才知をもってはいかんともなしがたい封建の世の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

壁にさえぎられて、青雲の夢もむなしく野に下ったのであってみれば、いずれも時代を白眼視し、末期的安逸と頽廃の底に身を横たえていた。したがって、その日常は、茶番のためのいたずらとはいいながら、棺桶を仲間の家にかつぎこむというような常軌を逸した毎日の繰り返しであり、彼らの生活を写した金鵞の滑稽本『七偏人』には、自嘲、自虐の影も濃い。

それはたとえば、半可通大愚のいじめかたにしても、香煎湯とみせて七色とうがらしの湯を飲ませ、ようかんとみせて、まぐろの切り身を食わせて嘔吐するまでいじめぬいたり、百物語をして執拗におどかして気絶させたり、茶番の失敗にしても、酔って羽目をはずしすぎた男が、どぶ泥のなかに倒れ、さらに肥桶に衝突して仲間のところへ逃げ帰って辟易させたりと、反撥をさえ感じさせるほどに過度のくすぐりによって全編が塗りつぶされていた。

そういう彼らが、明治の新時代にいたり、この種の惰眠さえ許されず、いっそう世をすねていったことは必然の道すじだった。

金鵞は、御家人出身で、一応教養もあるところから、瓜生政和の本名によって、西洋事情紹介書の『西洋新書』や『西洋見聞図解』などの啓蒙書を刊行し、表面上は戯作をすてた。しかし、そのじつは、橋爪錦造という変名によって、キリスト教を攻撃し、ヨーロッパ留学を非難するような、反時勢的な滑稽小説シリーズ『寄笑新聞』を書かずにはいられなかった。

これは、応賀とも共通した、新時代を白眼視する心境のあらわれだが、すでに幕末以来、他と

の摩擦をさけて飄々と生きてきた金鶯にしてみれば、表面的には、新時代風な転身とみせつつ、変名によって胸のもやもやを吐きださずにはいられないのだった。

そのような金鶯にくらべて、応賀の反動的姿勢は露骨なものがあった。

眉を落とし、歯を染める旧日本女性の風俗を弁護する『当世利口女』、千代田の栄え万代といった旧幕時代を郷愁する『近世あきれかへる』、洋学者を罵倒する『分限正札知恵秤』など、たんに戯作としては黙殺できないほどに反時代的気勢にみちみちているが、そこに、封建の世に人となるべき才知と野望とを抱きながらも夢やぶれ、いままた、いっそう自己を生かしえない新時代に直面して苦悶しつづける応賀の宿命的ともいうべきむなしいあがきがあった。

本書に登場するひとたちは、好むと好まざるとにかかわらず、金鶯や応賀がたどったような道すじを、心ならずも歩まねばならなかったひとたちだった。

このひとたちの生涯の跡をみるとき、そのなかに、現代日本の在りかたをおもわずにいられない。すなわち、「木枯し紋次郎」のようなアウトローが人気をあつめ、一見、太平無事な、そのくせニヒルでやりきれない現代日本にも通じる多くの問題がひそんでいるということなのだ。

万亭応賀

最後の木版印刷による
小説『明良二葉草』表紙

挫折の青春

文政元年（一八一八）、江戸の神田明神下の服部長狭勾当の家に男の子が生まれ、長三郎と名づけられたが、この名はのちに孝三郎とあらためられた。

服部勾当は、上総国（千葉県）長狭郡の出身で、失明してから江戸へ出て、勾当の位を買ったほどだから経済的にはゆたかだった。

そんな勾当にとっての夢は一子長三郎だった。おさないときから才知のひらめきをみせる長三郎に、勾当はどしどし学問をしこんだ。長三郎もまた、父親の期待と激励とをうけることによって、自己の才知に対する自負心と、そこから生まれた青雲の志を胸にいだくようになった。

こうしてはぐくまれた父と子の青雲の夢が花ひらく日をむかえた。

それは、勾当が、金にモノをいわせて、常陸（茨城県）下妻藩井上家の士分の株を買いあたえ、同家に出仕させたことだった。

士、農、工、商の身分制度のきびしい封建時代において、たしかに武士の身分は庶民のあこがれの的にちがいなかった。したがって、父勾当の満足はこの上ないものだったが、長三郎にとっても、それは自己の才知や学識の可能性をためすべき未知の世界だったことはいうまでもない。しかし、それにもかかわらず、彼はまもなく同家を致仕した。

というのは、しょせんは門地門閥のない新参者のかなしさ、個人的な才知や学識をもってしてはいかんともなしがたい封建の世の壁が、長三郎の前に高く大きく立ちふさがっていたがために、その夢が一瞬にして粉砕されてしまったということであったようだ。

こうしてふたたび野に下った長三郎は、十八歳のときから戯作者たちの仲間に入って、来る日も来る日も即吟の句作や茶番にうつつをぬかすことになった。

その仲間とは、為永春水亡きあとの人情本作家の第一人者松亭金水を中心にして、その門下で、人情本も滑稽本もこなす梅亭金鵞、あるいは、鶴亭秀我、竹葉舎金瓶、杉亭金升などのあまりぱっとしない作家たちや、金水の内弟子ではあるが、著作はせずに筆耕ばかりやっている古森金浄、さらに、金鵞の弟で絵師の梅の木鶯斎などで、悪ふざけのかぎりをつくした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com